

日本におけるプレートテクトニクスを受容と「日本沈没」 Acceptance of plate tectonics in Japan and "Sinking of Japan"

芝崎 美世子^{1*}

Miyoko Shibazaki^{1*}

¹ 大阪市立大学

¹Osaka City University

1973年に発表された小松左京の長編「日本沈没」は、空前の大ベストセラーとなり、同年12月公開の映画「日本沈没」も、翌年の興行収入第一位(邦画部門)を記録して大ヒットとなった。このような自然災害を扱ったSFパニック映画では、リアルな現実描写や地球科学についての最新理論が用いられる一方で、しばしば奇想天外な「IF」設定が挿入される。例えば、2004年公開の「デイ・アフター・トゥモロー」では、地球温暖化によって海流に変化が起き、急激に氷河期がやってくるが、海洋大循環などの地球科学が詳しく語られる一方で、物語の進行に伴って環境変化はきわめて急速になり、結局、寒波はわずか数十時間で襲ってくる。「日本沈没」では、プレート運動によって日本列島はわずか一年で失われてしまう。このような急展開や架空設定は、ドラマの盛り上がりには貢献するが、そこで描かれる地球科学理論は、こうした空想仮説も含めて一般社会への理解と認知を進めていく。「日本沈没」の大ヒットは、プレートテクトニクス一般への普及を進めたと言われている。

一方、科学コミュニティにおける新しい理論の導入は、科学的な実証研究と議論を必要とする。地質学におけるプレートテクトニクス理論の導入は、1969年に世界的に始まり、日本でも1970年代前半から日本列島の地質構造史を再構築する動きが始まって、1980年代以降の“放散虫革命”と呼ばれる爆発的な研究の進展へとつながったが、こうした議論や研究は、あまりに専門的すぎるためにしばしば外部からは見えにくい。日本におけるプレートテクトニクスは、SF映画のヒットや雑誌の特集などによって、急速に一般社会で認知されていたが、その一方で、複雑な付加体や日本海拡大などの実証的な研究が必要であった地質学では、その受容が相対的に遅れて見える傾向にあった。これは、導入期における議論に見られるように、「まだ仮説である」という「認識のずれ」としても表れている。しかし、個々のコミュニティにおいて、新しい科学理論がどのように「仮説」から「定説」へと進んだのかを考察することはたいへん重要であり、今後こうした社会的な背景による影響も含めて、詳しく検討する必要があると思われる。

キーワード: プレートテクトニクス, 科学史, 映画, 「日本沈没」

Keywords: plate tectonics, science history, movie, Nihon Chinbotsu